

平成30年度日本語指導が必要な児童生徒等支援研修会 菊川市

検証実施機関（団体）：静岡県教育委員会 菊川市教育委員会
静岡県教育委員会 静西教育事務所 南里 哉子

1 検証対象の研修・授業について（該当するものにチェックを入れてください。）

養成／研修	<input type="checkbox"/> 養成 <input checked="" type="checkbox"/> 研修
タイプ	<input checked="" type="checkbox"/> 基礎教育 <input checked="" type="checkbox"/> 専門教育 <input checked="" type="checkbox"/> 支援員教育
研修・授業日（期間）	2018年 11月19日
総時間数	180分
研修・授業科目名	平成30年度日本語指導が必要な児童生徒等支援研修会 菊川市
受講者	人数：24人 年齢層：30代～60代 立場：加配教員5人（小3 中2）・外国人支援員8人・教務主任10人 （加配有校5 加配無校5） 外国人児童生徒等教育の経験：ほぼ有り 日本語指導（成人対象を含む）の経験：あまりない

2 地域及び学校現場の外国人児童生徒等の受け入れの状況

（1）当該自治体における外国人児童生徒等の数・分布とその民族背景

ブラジル人児童生徒が最も多く在籍しているが、近年はフィリピンや中国にルーツのある児童生徒が増加傾向にある。

（2）当該自治体における外国人児童生徒等の受け入れ・指導体制

菊川市は学校数こそ少ないが在籍している外国人児童生徒数が多く、中学校数3校の内2校、小学校数9校の内3校に加配教員が配置されている。

外国人児童生徒は、編入時、菊川市を含む近隣の3市町で運営している初期支援教室「虹の架け橋教室」で半年間日本語を学んだ後に、各学校に在籍し、学習している。しかしその教室に行かない児童生徒も多くおり、その際は学校で対応することになる。

外国人児童生徒が数多く在籍している学校には、バイリンガル支援員が常駐し、児童生徒の学習指導や保護者対応、書類等の翻訳等にあたっている。

（3）外国人児童生徒等教育に関わる教員（一般教員を含む）、支援員の教育力の課題

初期支援教室に通学しても、学校で教科学習についていける程の日本語の力がついていないため、対応に困惑している教員が多い。また、加配教員が配置されている学校では特に、外国人児童生徒の対応について担当教員にお任せしてしまっているところが少なくない。

3 研修・授業の成果について

（1）（受講者アンケートより）

①受講者の研修への期待

- ・ 学校生活の指導（話し方、工夫など）
- ・ 外国人児童の学びの必要な内容
- ・ 日本語学習を行うための有効な手段
- ・ どのような支援が望ましいか
- ・ 具体的な指導方法、指導案
- ・ 保護者との連携
- ・ 外国人児童の学びを支える学習内容
- ・ 初期指導から教科学習への橋渡しの日本語指導
- ・ 外国人児童生徒の教育、日本語指導の制度（システム）や現状について
- ・ 母語と日本語の関わりについて
- ・ 外国人児童にとって学校においてどんな困り感があるか
- ・ 段階的な日本語習得方法

②受講者の研修内容の理解度・満足度

ア：24% イ：62% ウ：5% エ：0% 無回答：9%

- ・ 内容については全く想像していなかった。具体的な指導方法を考えることができて良かった
- ・ このような研修が初めてだったので、いい意味で一致していないということ。新たな知識を得ることができた。

③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動

- ・ 授業の考え方、授業案作成
- ・ 外国の人にとって難しい日本語の表現について
- ・ 外国籍生徒の公立高校退学率
- ・ JSLカリキュラムを意識した指導
- ・ 他グループで考えた方法などを参考に自分たちの授業案を考えたこと
- ・ 学校で触れる教科書等の日本語の難しさについて

④受講者が今後に見込む研修・授業の内容と活動（受講者アンケートⅣより）

- ・ 指導方法の注意点
- ・ 初期支援のシステムを変える方法
- ・ 学習意欲の高め方
- ・ 外国籍生徒の母国と日本の学校や生活の違いについて
- ・ 外国籍生徒や保護者、外国籍住民の意見
- ・ 外国人労働者の労働形態
- ・ 具体的な授業実践
- ・ 進路について
- ・ 特別の教育課程編成（時間割の組み方、事例紹介等）
- ・ 保護者との連携
- ・ 教科と日本語の統合学習（中学の事例）
- ・ やさしい日本語について
- ・ 今ある課題について話し合いたい
- ・ 教材研究

(2) 研修企画の立場から見た、研修の成果と課題

受講者の期待と実際の研修内容はほぼ一致していたようで、良かった。また、いい意味で期待と一致していなかったという声もあり、期待を上回る内容の研修ができたのは大変良かった。

取り出し指導も大切であるが、外国人児童生徒がほとんどの時間を過ごす在籍学級でも、工夫次第で教科指導が行えることを、ユニバーサルデザインの視点で考えてもらうことができた。

今回研修には「外国人担当」として参加されているが、担当外でも知っていただきたいことであるため、同じような研修が校内研修の一環として行えればなお良い。

4. モデルプログラムについて

(1) 養成・研修内容構成（報告書 pp. 72-76）について（意見）

内容が基礎・専門・支援員向けにそれぞれ書かれており、大変わかりやすいが、様々な立場の方が参加される研修においては、「<支援員>と書いていないから取り扱ってはいけないだろうか」と悩んでしまう項目もある。よって、項目によってはカテゴライズされていない方がいい場合がある。

(2) モデルプログラム（報告書 pp. 207-244）について（意見）

内容によってどのような活動をしたらいいか考える上では非常に参考になった。講師やファシリテーターとして研修を進める身であれば、更に多くの活動が出てくるはずなので、例えばウェブ上で実際に行った活動について簡単な実践報告ができるような場があればより良い研修が作れるのでは。

(3) モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。

現場の声をそのまま研修に活かせる立場であれば、ガイドブックのような存在になってくれると思う。現場と講師の仲介役だと、どちらかがモデルプログラムを知らなければ逆にやりにくくなる（こちらがモデルプログラムの内容を想定していても、講師側がそれを知らなければ意思の疎通が難しくなるため）。

(4) モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしいか。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

日本語支援に関する様々な知識を吸収し、実践に活かす力。
講義を聞くだけでなく、グループワークなど個別に考える活動も必要になるため、研修を組み立てる際にモデルプログラム内の活動を参考にすると良いのでは。